

自閉スペクトラム症児の親の自己成長感と障害受容

野上 美樹 岐阜県立中濃特別支援学校
 小島 道生 筑波大学人間系
 井澤 信三 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

要旨：本研究では、自閉スペクトラム症児の親を対象とした自己成長感と障害受容を測定する質問紙を開発し、それらの影響要因について分析するとともに、自己成長感と障害受容の関係について検討した。その結果、自己成長感では「思いやり・感受性」「精神的強さ」「積極性」の3因子、障害受容では、「家族」「人とのつながり」「自己肯定」「否定感」の4因子が抽出された。障害受容では「否定感」で高等学校より小学校高学年が有意に高く、小学校高学年においては他の学年の時期よりも母親に対して支援が必要となる可能性が示唆された。また、障害受容では、「人とのつながり」について通常学級とその他の間に有意差があり、通常学級に所属する親の支援の必要性が明らかとなった。自己成長感と障害受容の関係について検討したところ、「感受性・思いやり」、「積極性」と「人とのつながり」、「積極性」と「自己肯定」は中程度の相関がみられ、積極性が高まることで人とつながり、自己肯定感も高まるという好循環になる可能性が示唆された。

Key Words： 自己成長感、自閉スペクトラム症、障害受容

1. 問題と目的

近年、障害児をもつ親の肯定的な側面に着目した自己成長感に関する研究が行われるようになってきている。奇¹⁾は、障害児・者をもつ母親に対し、「育児を通して自分が成長したと思うところ」について自由記述を求めた。その結果、母親を子どもの年齢、すなわち就学前の幼児期、就学から思春期に向かい始める以前の小学校低学年、自己主張をはっきりし始める思春期に入る小学校高学年から中学までの時期、進路がある程度定まる高校以降の時期に分けてみると、「子ども中心の接し方」から「人への思いやり」の方向へと、母親が自分の成長として焦点を当てる内容が移っていく傾向にあることなどを報告している。熊倉・谷村・三浦²⁾は、知的障害児の母親の育児負担感と自己成長感、さらにはソーシャルサポートとの関係について検討した。その結果、母親の自己成長感として「人間的成熟と社会への関心の広がり」「寛大さと積極性」「我が子・他者への思いやり」の3因子を抽出するとともに、自己成長感はソーシャルサポート高群が低群よりも有意に高

いことなどを示している。橋本・佐久間³⁾は知的障害養護学校の小学部から高等部に在籍する子どもをもつ母親を対象とした自己成長感に関する調査を行った。その結果、小学部、中学部、高等部の順に自己成長感が高い結果であったことを報告した。また、橋本・奥住・熊井⁴⁾は、障害児を育てる母親の「自己成長感」尺度の開発を試み、「思いやり」「精神的強さ」「障害理解」の3因子から構成されることを報告している。その他、発達障害児の保護者¹⁰⁾や知的障害児の母親を対象とした研究⁷⁾が報告されている。以上のように、近年では障害児をもつ親の肯定的な側面である自己成長感が注目され、関係要因なども含めて検討され、障害種別にも研究が展開されているといえる。

しかし、これまでの先行研究では、自閉スペクトラム症児の親の自己成長感の実態や影響要因については十分に明らかにされていない。また、自己成長感とストレスなどの研究は展開されているものの¹⁰⁾、自閉スペクトラム症児の親の自己成長感と障害受容との関係については明らかにされていない。親の障害受容が進んでいるほど自己成長感も感じやすいと予想されるが、こうした心理的なメカニズムは十分に

明らかにされていないと言えよう。

そこで、本研究では自閉スペクトラム症児の親の自己成長感とそれに影響を与える要因や障害受容との関係について明らかにすることを目的とする。

● Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

自閉症の親の会などに所属する親 92 名に直接手渡し及び郵送によるアンケート調査を実施した。そのうち、82 名から回答を得た(回収率 89%)。欠損値があった 2 名のデータを除き、分析対象は 80 名であった。なお、アンケート調査の実施にあたっては、研究協力の説明文書を同封し、同意が得られた対象者についてのみ分析を行った。

2. 調査時期

2014 年 6 月から 11 月に調査を実施した。

3. 質問紙の内容

(1) フェイスシート

フェイスシートの項目は子ども 9 項目と保護者 3 項目の 12 項目である。子どもについては、性別、学年、年齢、学級、診断名、診断時の年齢などについて尋ねた。親については、子どもとの関係(続柄)、年齢などについて尋ねた。

(2) 自己成長感と障害受容

自己成長感に関する質問項目は、先行研究²⁰⁾を参考に、18 項目から構成される独自の質問紙を作成した。障害受容に関する項目については、先行研究⁸⁹⁾を参考に、19 項目から構成される独自の質問紙を作成した。

回答方法は、親自身がどれくらい当てはまるかを 4 件法(「1: 当てはまる」「2: 少し当てはまる」「3: あまり当てはまらない」「4: 全く当てはまらない」)で回答を求めた。そして、「当てはまる」に 1 点、「少し当てはまる」に 2 点、「あまり当てはまらない」に 3 点、「全く当てはまらない」に 4 点の得点化を行った。なお、障害受容の項目において、否定的な内容の質問項目については、得点を逆転させた。

したがって、自己成長感の質問項目及び障害受容の項目においても、得点が低ければ低いほど自己成長感を感じており、障害受容も進んでいると考えられる。また、調査用紙には、これら選択肢による質問の他に自由記述 5 項目がある。

● Ⅲ. 結果

1. 調査対象者の属性など

調査対象者の属性などについては、以下の通りである。

(1) 子どもの性別・診断名

性別は、男 66 名、女 14 名であった。診断名は、広汎性発達障害 45 名、高機能自閉症 20 名、自閉症 7 名、アスペルガー症候群 6 名、その他 13 名であった(複数回答あり)。

(2) 親自身の続柄・年代

続柄は、父 1 名(母同席)、母 78 名、祖母 1 名(祖父母が子育てを行っている)であった。年齢は 30 代 13 名、40 代 57 名、50 代 9 名、60 代 1 名であった。

2. 項目の精選と内的整合性

尺度の信頼性を高めるために、クロンバックの α 係数による項目の分析を行った。その結果、自己成長感における α 係数は 18 項目全体で .9025 であり、削除時の α 係数が高くなる 2 項目(⑨と⑩)を削除した。障害受容における α 係数は 19 項目全体で .8235 であった。⑥と⑪については削除時の α 係数が高くなったが、重要な項目と考え、そのまま採用した。

3. 因子構造

自己成長感において、精選された 16 項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。共通性は SMC で推定し、固有値(基準値を 1 以上とした)の落差、単純構造、解釈可能性の高さを考慮し、因子数は 3 が妥当と考えた。回転後の因子負荷量 0.4 以下の 2 項目(⑧「自分を客観的に捉えられるようになった」、⑫「我が子に限らず障がい児を見る視点が変わった」)を除外した(Table 1)。

障害受容において、19 項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。共通性は SMC で推定し、固有値(基準値を 1 以上とした)の落差、単純構造、解釈可能性の高さを考慮し、因子数は 4 が妥当と考えた。回転後の因子負荷量 0.4 以下の 3 項目(⑤「保育士や教師は私の気持ちを分かってくれる(くれた)」、⑬「子どもが他人とどう関わるのが予測することができない」、⑭「人前で自分の意見をきちんと述べることができる」)を除外した(Table 2)。

因子分析の結果、自己成長感においては、第 1 因子は、他人を思う気持ちや、感動したり感

受性が強くなったりするという内容であったため「思いやり・感受性」と命名した。第2因子は、物怖じしない・くよくよしないといった内容であったため「精神的強さ」と命名した。第3因子は、自分の意見を述べる・関心をもつという内容であったため「積極性」と命名した。

障害受容においては、第1因子は、回答者とその家族に関する内容であったため「家族」と命名した。第2因子は、仲間や子どもと関わる人々に関する内容であったため「人とのつながり」と命名した。第3因子は、自分自身を肯定する気持ちであったため「自己肯定」と命名した。第4因子は、子どもに対するネガティブな感情であったため「否定感」と命名した。

下位尺度の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数による推定を行った。自己成長感の因子1が.8904、因子2が.9078、因子3が.6887であった。障害受容に関しては、因子1が.8007、因子2が.7404、因子3が.7859、因子4が.6920であった。

4. 各因子と各要因の関係

(1) 各因子と学年との関係

自己成長感に関する項目と障害受容に関する項目の因子について、小学校低学年(1年~3年)、小学校高学年(4年~6年)、中学校、高等学校の平均値と標準偏差を算出した(Table 3)。

自己成長感の因子1「感受性・思いやり」について、小学校低学年(1年~3年)、小学校高学年(4年~6年)、中学校、高等学校の学年の違いによる差を検討するため、一要因の分散分析を行った。その結果、有意でなかった($F(3,73)=2.12, n.s.$)。同様に、因子2「精神的強さ」($F(3,73)=0.75, n.s.$)、因子3「積極性」($F(3,73)=1.29, n.s.$)も有意でなかった。

障害受容の因子1「家族」について、小学校低学年(1年~3年)、小学校高学年(4年~6年)、中学校、高等学校の学年の違いによる差を検討するため、一要因の分散分析を行った。その結果、有意でなかった($F(3,73)=0.88, n.s.$)。同様に、因子2「人とのつながり」($F(3,73)=1.80, n.s.$)、因子3「自己肯定」($F(3,73)=2.26, n.s.$)についても有意でなかった。しかし、因子4「否定感」

Table 1 自己成長感の質問項目及び因子分析結果

No.	質問項目	因子負荷量			共通性
		因子1	因子2	因子3	
②	他人の気持ちを考えるようになった	.8307	.1931	.0789	0.7335
①	他人に優しくなった	.8284	.2007	.1026	0.7371
③	ささやかなことに感謝するようになった	.6930	.0166	.2898	0.5645
④	他人の気持ちを思いやるゆとりができた	.6325	.2147	.2216	0.4953
⑦	感受性が豊かになった	.5813	.1861	.3515	0.4961
⑥	広い心をもてるようになった	.5590	.3237	.1445	0.4381
⑤	当たり前の中で感謝するようになった	.5561	.1567	.3490	0.4557
⑫	精神的にたくましくなった	.1888	.8866	.0526	0.8245
⑪	少々のことではへこたれなくなった	.1520	.8751	.1351	0.8072
⑬	小さいことにくよくよしなくなった	.2381	.7728	.1343	0.6719
⑩	どこに行っても物怖じしなくなった	.1279	.7154	.3732	0.6675
⑮	自分の意見をしっかり言うようになった	.1047	.1177	.7789	0.6316
⑭	積極的に外に出て行くようになった	.2620	.3153	.5110	0.4291
⑯	福祉、障がい児・者に関心をもつようになった	.3394	.1193	.4937	0.3731
	寄与率	23.96%	19.94%	12.63%	
	累積寄与率	23.96%	43.90%	56.53%	

□内は負荷量0.4以上

については有意であった($F(3,73)=2.67, p<.10$). 多重比較の結果, 小学校高学年と高等学校の間に有意差があった。

(2) 各因子と所属学級との関係

自己成長感に関する項目と障害受容に関する項目の因子について, 所属学級別(通常学級, 特別支援学級, その他)の合計の平均値と標準偏差を算出した(Table 4).

自己成長感の因子 1「感受性・思いやり」について, 所属している通常学級, 特別支援学級, その他の違いによる差を検討するため, 一要因の分散分析を行った。その結果, 有意でなかつ

た($F(2,76)=1.01, n.s.$)。同様に, 因子 2「精神的強さ」($F(2,76)=0.61, n.s.$), 因子 3「積極性」($F(2,76)=2.11, n.s.$)についても有意でなかつた。

障害受容の因子 1「家族」について, 所属している通常学級, 特別支援学級, その他の違いによる差を検討するため, 一要因の分散分析を行った。

その結果, 有意でなかつた($F(2,76)=1.10, n.s.$)。因子 2「人とのつながり」については同様の分析結果, 有意であった($F(2,76)=3.26, p<.05$)。多重比較の結果, 通常学級とその他の間に有意差があった。しかし, 通常学級と特別支援学級, 特別支援学級とその他の間の差は有意でなかつた。

Table 2 障害受容の質問項目及び因子分析結果

No.	質問項目	因子負荷量				共通性
		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	
⑦	子どものことで、私と家族の間に隙間ができた感じがする	.9024	-.0133	-.0145	.0153	0.8150
⑥	家族は、子どものことを何も分かっていないと感じることがある	.7702	-.1873	.1104	-.0290	0.6414
⑧	家族は、子どもと積極的に関わってくれる	.6610	.0922	.0075	.1526	0.4688
⑨	家族は私が落ち込んでいると元気づけてくれる	.5623	.3113	.1247	.0093	0.4288
⑰	子どもがいることで家族が和やかになる	.4025	.3653	.0977	.0118	0.3051
③	自分の気持ちを発散できる仲間がいる	.1440	.7121	.0676	.2621	0.6011
④	子どもと関わっている指導員、教師、ヘルパーなどが、子どもと真剣に向き合っていると感じられる	-.0293	.6101	.0765	.2516	0.4423
①	「そこへ行けば安心できる」と思える場がある	.0032	.6006	.2055	.2724	0.4771
②	親子で参加するのが楽しみだと思える場がある	-.0200	.5049	.1529	.0704	0.2836
⑮	私にも欠点はあるが、それもまた私の一部として認めている	.0579	.0442	.7758	.3201	0.7096
⑯	私は子どもと共に成長してきた	.0831	.4198	.7196	-.1223	0.7159
⑬	私という人間を気に入っている	.0152	.2037	.6426	.4041	0.6179
⑩	子どもが何を感じ、何を考えているのか私には分からない	-.1685	.2076	.1778	.5776	0.4367
⑫	私は子どもに振り回されればなしである	.3228	.0772	.0793	.5351	0.4028
⑱	「なぜうちの子だけが障がいをもって生まれてきたのか? (なぜうちの子だけに障がいがあるのか?)」という気持ちになることがある	.0978	.2307	.2334	.5205	0.3882
⑲	子どもの将来に見通しが立たなくて暗い気分になることがある	-.0028	.1034	.1218	.4306	0.2110
	寄与率	13.46%	12.11%	10.04%	9.05%	
	累積寄与率	13.46%	25.57%	35.61%	44.66%	

□内は負荷量 0.4 以上

因子 3「自己肯定」については、有意でなく ($F(2,76)=1.63, n.s.$), 因子 4「否定感」についても有意でなかった ($F(2,76)=1.92, n.s.$).

(3) 各因子と診断後の経過年数との関係

自己成長感に関する項目と障害受容に関する項目の因子について、診断を受けてからの経過年数別(5年未満, 5年以上10年未満, 10年以上)の合計の平均値と標準偏差を算出した (Table 5).

自己成長感の因子 1「感受性・思いやり」について、診断を受けてから 5年未満, 5年以上10年未満, 10年以上の違いによる差を検討するため、一要因の分散分析を行った。その結果、有意でなく ($F(2,73)=3.14, n.s.$), 因子 2「精神的強さ」 ($F(2,73)=1.19, n.s.$), 因子 3「積極性」 ($F(2,73)=0.45, n.s.$)のいずれも有意でなかった。

障害受容の因子 1「家族」について、診断を受けてから 5年未満, 5年以上10年未満, 10年以上の違いによる差を検討するため、一要因の分散分析を行った。その結果、有意であった ($F(2,73)=4.64, p<.05$). 多重比較の結果、5年未満と5年以上10年未満の間に有意差があった。しかし、5年未満と10年以上, 5年以上10年未満と10年以上の間の差は有意でなかった。障害受容の因子 2「人とのつながり」についても、一要因の分散分析を行った。その結果、有意であった ($F(2,73)=9.00, p<.01$). 多重比較の結果、5年未満と10年以上, 5年以上10年未満と10年以上の間に有意差があった。しかし、5年未満と5年以上10年未満の間の差は有意でなかった。障害受容の因子 3「自己肯定」について診断を受けてから 5年未満 5年以上10年

Table 3 学年別平均値と標準偏差

	因子	カテゴリー	N	平均値	標準偏差 (SD)
自己成長感	因子 1 「感受性・思いやり」	小学校低学年	12	15.75	2.52
		小学校高学年	36	14.72	4.85
		中学校	13	12.15	2.38
		高等学校	16	13.37	3.49
	因子 2 「精神的強さ」	小学校低学年	12	10.58	3.04
		小学校高学年	36	10.31	3.37
		中学校	13	9.00	3.16
		高等学校	16	9.44	3.24
	因子 3 「積極性」	小学校低学年	12	6.75	1.09
		小学校高学年	36	6.50	1.85
		中学校	13	5.46	2.02
		高等学校	16	6.13	2.00
障害受容	因子 1 「家族」	小学校低学年	12	10.58	3.68
		小学校高学年	36	10.25	2.74
		中学校	13	11.46	3.63
		高等学校	16	9.50	3.39
	因子 2 「人とのつながり」	小学校低学年	12	8.33	2.32
		小学校高学年	36	7.33	2.16
		中学校	13	7.31	2.43
		高等学校	16	6.38	1.76
	因子 3 「自己肯定」	小学校低学年	12	5.75	2.09
		小学校高学年	36	6.17	1.80
		中学校	13	6.00	1.36
		高等学校	16	4.81	1.42
因子 4 「否定感」	小学校低学年	12	10.50	1.80	
	小学校高学年	36	11.06	2.07	
	中学校	13	10.69	2.40	
	高等学校	16	9.19	2.35	

Table 4 所属学級別の平均値と標準偏差

因子	カテゴリー	N	平均値	標準偏差 (SD)	
自己成長感	「感受性・思いやり」	通常学級	61	14.66	4.36
		特別支援学級	12	13.17	3.58
		その他	6	12.83	2.48
	「精神的強さ」	通常学級	61	10.07	3.09
		特別支援学級	12	9.42	3.66
		その他	6	8.67	3.99
	「積極性」	通常学級	61	6.46	1.85
		特別支援学級	12	6.25	1.92
		その他	6	4.83	1.07
障害	「家族」	通常学級	61	10.33	3.42
		特別支援学級	12	11.58	2.53
		その他	6	9.33	2.43
害受容	「人とのつながり」	通常学級	61	7.61	2.33
		特別支援学級	12	7.00	2.27
		その他	6	5.17	0.90
「自己肯定感」	通常学級	61	5.84	1.87	
	特別支援学級	12	5.92	1.32	
	その他	6	4.50	0.50	
「否定感」	通常学級	61	10.70	2.11	
	特別支援学級	12	10.75	2.55	
	その他	6	8.83	2.54	

Table 5 診断後の経過年数別の平均値と標準偏差

因子	カテゴリー	N	合計	標準偏差 (SD)	
自己成長感	「感受性・思いやり」	5年未満	26	15.65	3.02
		5年以上 10年未満	32	13.56	4.92
		10年以上	18	12.78	3.24
	「精神的強さ」	5年未満	26	9.00	2.65
		5年以上 10年未満	32	10.34	3.37
		10年以上	18	9.72	3.72
	「積極性」	5年未満	26	6.42	1.71
		5年以上 10年未満	32	6.31	1.93
		10年以上	18	5.89	1.97
障害	「家族」	5年未満	26	11.92	3.51
		5年以上 10年未満	32	9.50	2.72
		10年以上	18	9.72	3.23
害受容	「人とのつながり」	5年未満	26	8.38	2.40
		5年以上 10年未満	32	7.22	2.10
		10年以上	18	5.61	1.50
「自己肯定」	5年未満	26	5.88	1.83	
	5年以上 10年未満	32	5.81	1.91	
	10年以上	18	5.17	1.26	
「否定感」	5年未満	26	11.27	2.18	
	5年以上 10年未満	32	10.66	2.13	
	10年以上	18	9.28	2.28	

未満, 10年以上の違いによる差を検討するため, 一要因の分散分析を行った. その結果, 有意でなかった($F(2,73)=1.01, n.s.$). 障害受容の因子4「否定感」では, 有意であった($F(2,73)=4.33, p<.05$). 多重比較によると, 5年未満と10年以上の間に有意差があった. しかし, 5年未満と5年以上10年未満, 5年以上10年未満と10年以上の間の差は有意でなかった.

(4) 各因子と親の年代との関係

自己成長感に関する項目と障害受容に関する項目の因子について, 親の各年代(30代, 40代, 50代)の合計値と標準偏差を算出した

(Table 6).

自己成長感の因子1「感受性・思いやり」について, 親の年代が30代, 40代, 50代の違いによる差を検討するため, 一要因の分散分析を行った. その結果, 有意でなかった($F(2,76)=0.35, n.s.$). 自己成長感の因子2「精神的強さ」($F(2,76)=1.40, n.s.$), 因子3「積極性」($F(2,76)=0.88, n.s.$)のいずれも有意でなかった. 障害受容の因子1「家族」について, 親の年代が30代, 40代, 50代の違いによる差を検討するため, 一要因の分散分析を行った. その結果, 有意でなかった($F(2,76)=0.49, n.s.$)因子2「人

Table 6 親の年代別の平均値と標準偏差

因子	カテゴリー	N	合計	標準偏差 (SD)	
自己成長感	「感受性・思いやり」	30代	13	14.08	3.45
		40代	57	14.47	4.43
		50代	9	13.22	3.39
	「精神的強さ」	30代	13	10.15	2.96
		40代	57	10.16	3.23
		50代	9	8.22	3.39
	「積極性」	30代	13	6.62	1.27
		40代	57	6.32	1.87
		50代	9	5.56	2.36
障害受容	「家族」	30代	13	10.31	2.61
		40代	57	10.77	3.29
		50代	9	9.67	3.65
	「人とのつながり」	30代	13	8.00	1.62
		40代	57	7.42	2.51
		50代	9	6.00	1.25
	「自己肯定」	30代	13	6.23	1.93
		40代	57	5.96	1.68
		50代	9	4.22	1.03
「否定感」	30代	13	3.08	0.83	
	40代	57	3.11	0.72	
	50代	9	2.67	0.82	

Table 7 自己成長感と障害受容の相関関係

	自己成長感因子1 「感受性・思いやり」	自己成長感因子2 「精神的強さ」	自己成長感因子3 「積極性」
障害受容因子1 「家族」	0.064	-0.042	0.021
障害受容因子2 「人とのつながり」	0.411	0.232	0.475
障害受容因子3 「自己肯定」	0.285	0.374	0.433
障害受容因子4 「否定感」	0.216	0.080	0.318

とのつながり」については有意でなかったが(F(2,76)=2.07, n.s.), 因子3「自己肯定」については、有意であった(F(2,76)=4.60, p<.05). 多重比較の結果、30代と50代、40代と50代の間に有意差があった。障害受容の因子4「否定感」については分散分析の結果、有意でなかった(F(2,76)=1.29, n.s.).

5. 自己成長感と障害受容の相関

自己成長感の3つの因子と、障害受容の4つの因子の相関関係を分析するために、Pearsonの積率相関係数を算出した(Table7). その結果、「感受性・思いやり」と「人とのつながり」に中程度の正の相関があった。「感受性・思いやり」と「自己肯定」、「感受性・思いやり」と「否定感」に弱い正の相関があった。「精神的強さ」と「人とのつながり」、「精神的強さ」と「自己肯定」に弱い正の相関があった。「積極性」と「人とのつながり」、「積極性」と「自己肯定」に中程度の正の相関があった。「積極性」と「否定感」に弱い正の相関があった。

IV. 考察

1. 項目の精選

クロンバックの α 係数による推定を行ったところ、自己成長感については、項目⑧「自分を客観的に捉えられるようになった」、項目⑩「我が子に限らず障がい児を見る視点が変わった」を削除した。障害受容については、項目⑤「保育士や教師は私の気持ちを分かってくれる(くれた)」、項目⑭「人前で自分の意見をきちんと述べることができる」を削除した。自己成長感尺度と障害受容の尺度の抽出された各因子の α 係数は、一部因子で.70よりも低く、課題が残ると考えられるが、その他の因子は.70以上であり、概ね一定の内的整合性が証明されたとと言える。

2. 因子構造について

因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果、自己成長感の因子は「感受性・思いやり」「精神的強さ」「積極性」の3つを抽出した。障害児の「自己成長感」尺度の開発を行った先行研究³⁾では、「思いやり」「精神的強さ」「障害理解」の3因子が抽出されており、本研究で抽出された3因子のうち2因子がほぼ共通するものであった。したがって、障害全般を対象とし

た自己成長感尺度と思いやりや精神的な強さといった心理的な側面については共通しているものの、他者とのかかわりと障害理解という点において異なる構造である可能性が示唆された。

障害受容の因子は「家族」「人とのつながり」「自己肯定」「否定感」の4つであった。本研究では、肯定感や否定感といった自分自身に対する感情以外にも、「家族」や「人とのつながり」といった家族・社会的要因が見いだされている。高機能広汎性発達障害児をもつ親の適応に関連する要因として、①診断告知の要因(告知のされ方、告知の時期)、②子どもの要因(子どもの不適応行動や問題行動)、③親の個人内要因(コーピング方略、ハーディネス)、④家族・社会的要因(夫婦関係や家族の凝集性、ソーシャルサポート)、⑤家族のライフステージが指摘されている¹²⁾。したがって、本研究では親の適応に影響を与える重要な要因も含まれて因子が抽出されたと考えられる。

3. 各因子と各要因の関係

学年別に検討したところ、自己成長感についてはいずれも有意差がみられなかった。その一方、障害受容では因子4「否定感」で高等学校より小学校高学年が有意に高かった。定型発達児は9、10歳の節を超えると、ギャンググループと呼ばれる同年代の仲間集団を形成する時期であり、高機能自閉症児はいじめや排除の対象になりやすい¹¹⁾。したがって、小学校高学年の頃は、学校での集団活動などで対人関係の課題が生じやすい時期とも言える。子どものこうした子どもの対人関係面での課題が、保護者の心理に影響をし、他の年代に比べて否定感を強める傾向があるのかもしれない。高機能広汎性発達障害児をもつ母親(子どもの平均年齢12.8歳、9歳~16歳)の障害認識について、半構造化面接により検討した研究からは、障害の告知を受けて、母親は子どもの障害に対する理解が進んだ後も、「子の受け入れ」と「障害の受けとめきれなさ」を周期的に体験していることが示されている¹³⁾。こうした揺れ動く心理のなかで、本研究からは特に小学校高学年においては他の学年の時期よりも心理的な支援が必要になる可能性を示唆していると言えよう。

所属学級別に検討したところ、障害受容について因子2「人とのつながり」において、その他よりも通常学級が有意に高かった。その他には、特別支援学校、高等特別支援学校、サポート校、適応指導教室が含まれている。それらの

学校・教室においては、一般に障害に関する専門性のある教職員がおり、子どもは安心して過ごしやすい環境設定になっている可能性が高い。また、親も、周囲の児童生徒たちも障害のある場合が多いため、悩みなどを共有しやすく親しくなりやすいと推測される。通常学級に所属する子どもの親は、周りの親からの理解が得られず苦勞していることが多いと予想される。したがって、こうした学校の環境設定や周囲の理解のなさから、その他に比べて人とのつながりに違いを生じていると推察される。

診断後の経過年数別に検討したところ、障害受容の因子 1「家族」に有意な差がみられ、5 年未満が 5 年以上 10 年未満より得点が高かった。家族の因子には、家族とのつながりなどに関する内容が含まれているが、本研究では主に母親がアンケート調査に回答を行っていたことを踏まえると、診断 5 年未満の母親は家族とのつながりを感じにくい状態に陥っていると推察される。高機能広汎性発達障害児を・者をもつ父母を対象とした調査研究から、診断時に母親の多くが肯定と否定の両面的感情をもつものに対し、父親の多くは否定的感情のみをもち、障害を認めにくかったことが示されている¹⁴⁾。ただし、告知から時間が経過するにしたがい、父親も障害を認めることができ、父母間で違いがなくなっていたことを報告している¹⁵⁾。したがって、診断後 5 年未満の親に対しては、父親と母親の両方が子どもの支援にかかわり、互いに支え合うような関係が不可欠であり、なかでも父親の子どもに対する理解と母親へのサポートが重要であると考えられる。

障害受容の因子 2「人とのつながり」では、5 年未満が 10 年以上より有意に高く、5 年以上 10 年未満が 10 年以上より有意に高かった。したがって、診断後 10 年以上経つと、子どもを通して出会った人々との人間関係が成熟し、親の会やサークルで知り合った先輩や仲間、医療関係者、療育施設・相談機関の職員などと信頼関係を構築できているのではないかと考えられる。障害受容因子 4「否定感」では、5 年未満が 10 年以上より有意に得点が高いという結果であった。この理由の一つとしては、子どもの年齢が上がるにつれ、親の子どもに対する期待感が下がり、親の理想とする子ども像を追い求めないようになったことが影響したと考えられる。いずれにせよ、診断を受けて 10 年以上経つと、「子どもを理解できない」「どうしてこの子に障害があるのか」「将来どうなるのか」という

困惑や不安を感じにくくなると言えよう。

親の年代別に検討したところ、障害受容因子 3「自己肯定」にのみ有意差が見られた。50 代、40 代、30 代の順であり、年代が上がるにつれ自己肯定感が高くなるという結果であった。加齢とともに自分自身に対する肯定的な感情が高まり、子どもとの関係も良好になると考えられる。

4. 自己成長感と障害受容の相関関係

「感受性・思いやり」と「人とのつながり」、「積極性」と「人とのつながり」、「積極性」と「自己肯定」は、中程度の相関があった。「感受性・思いやり」と「人とのつながり」に関して、親の会・サークル、医療関係者、教育関係者、療育施設や相談機関などの人々との信頼関係を築き、親自身や子どもを受け入れてもらえる場があり、安心感を抱くことができると、心にゆとりができ、他人に対して優しくなれたり思いやりたりすることができるようになるのかもしれない。高機能広汎性発達障害児をもつ母親の障害認識について検討した先行研究¹³⁾では、親の会のサポートを得ることで、自身の悩みや子どもに対するネガティブな感情を親の会で共有することで情緒的な安定を得ていたりしたことが示されている。したがって、人とのつながりにおいて、こうした心理的な安定がもたらされ、感受性や思いやり、自己肯定感が高まるのかもしれない。

「積極性」と「人とのつながり」においては、親子を受け入れてくれる場や人があり、それに対してポジティブな感情を抱くと、より一層積極的に外出し人とのつながりが生まれるといった好循環に至ると考えられる。したがって、両者の関係に相関がみられたと推察される。

文 献

- 1) 別府哲(2010)：小学校高学年・中学校での支援の実際。別府哲・小島道生(編著)、「自尊心」を大切にしたい高機能自閉症の理解と支援。有斐閣選書, 170-189.
- 2) 橋本真規・奥住秀之(2008)：障害児を育てる親の発達に関する文献検討, 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 59, 243-253.
- 3) 橋本真規・奥住秀之・熊井正之(2010)：障害児を育てる母親の「自己成長感」尺度の作成と信頼性・妥当性の検証。発達障害研究, 32(5), 458-468.

- 4)橋本真知子・佐久間宏(2004)：障害児をもつ母親の自己成長感に関する研究-母親へのアンケート調査を通して-宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要, 27, 323-332.
- 5)奇恵英(1999)：障害児をもつ親から学ぶ,教育と医学,47(6),469-475.
- 6)熊倉朋子・谷村厚子・三浦咲(2000)：知的障害児の母親における育児負担感と自己成長感について～ソーシャルサポートとの関連から～. 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要, 5, 1-15.
- 7)小谷裕美・石井栄子(2015)：知的障害児の母親の子育て負担感および自己成長感に影響を与える要因. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 23, 1-18.
- 8)松下真由美(2003)：軽度発達障害児をもつ母親の障害受容過程についての研究,応用社会学研究,13,28-52.
- 9)大野雄一・長谷川智子(2011)：母親の障害受容に影響を与える要因についての因果モデルの検討,発達障害研究,33(4),404-415.
- 10)瀧水城・中村真理(2014)：発達障害児を養育する保護者のストレスと自己成長感—ソーシャルサポートとの関連—,東京成徳大学臨床心理学研究,14,1-6.
- 11)山岡祥子・中村真理(2008)：高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識—父と母との相違—,特殊教育学研究,46(2),93-101.
- 12)山根隆宏(2009)：高機能広汎性発達障害児をもつ親の適応に関する文献的検討,神戸大学大学院発達環境学研究科研究紀要,3(1),29-38.
- 13)山根隆宏(2010)：高機能広汎性発達障害児をもつ母親の障害認識の困難さ,神戸大学大学院発達環境学研究科研究紀要,4(1),151-159.

(受稿 H27. 8. 25, 受理 H27. 10. 30)